

住居内部における住民の生活様態と路地空間との関係

大橋 良介¹・中井 祐²・永山 哲³

¹非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻（〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:ohashi@keikan.t.u-tokyo.ac.jp）

²正会員 工博 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻（〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:yu@keikan.t.u-tokyo.ac.jp）

³非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻（〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:satoru@keikan.t.u-tokyo.ac.jp）

路地空間とはその空間的特徴ゆえ、人間関係や人々の生活と空間との相互影響が明確に表れる空間である。このような特徴を持つ路地空間をその特徴に着目して研究することは、これまでの居住空間を振り返るだけでなく、今後の居住空間を考える際に非常に重要と思われる。

本研究ではフィールド調査により得られた路地空間と各家の内部空間の構成についての詳細な情報をもとに、既往研究及び自らが調査した路地の空間と住居内部、住民の生活との関係を「防御」に着目して分析を行った。それにより、あふれ出しやセットバックが薄い防御の層として機能していることや、人間関係や住民の人間性により防御層のあり方に特徴があることを明らかにした。

キーワード:路地、防御、人間関係、あふれ出し、フィールド調査

1. はじめに

(1) 背景

路地空間は、狭い場所に人が密集して住む必要のあることが大きな特徴である。その空間的特徴ゆえに、人の生活が個々の家にとどまらず住民の共有空間である外部空間にはみ出したり影響を及ぼす。逆に外部空間の様子や人間関係、周囲の家の生活が、外部空間だけでなく個人の家の中にまで影響を及ぼすこともある。すなわち、路地空間とは人間関係や人々の生活と空間が互いに影響を及ぼしあうのが明確に表れる空間なのである。

このような特徴に焦点を当て、路地空間を研究したものは永山(2007)「住民・住居内部との関係性に着目した路地空間の調査と考察」^①がある。この研究では根津のある路地を対象として、路地空間、各家の内部構成等を詳細にわたってフィールド調査し、人間関係と路地空間、住居と路地空間との関係性に着目して調査・分析している。同時に対象路地が一つしかないこと、路地空間の様々な特徴が並列的に述べられていることが課題として挙げられている。

以上の背景や既往研究の現状より、以下の3点を目的として本論文を展開する。

- ・路地空間と各家の内部空間の構成についての詳細な調査事例を蓄積すること
- ・路地空間と住居内部、住民の生活との関係性に着目

して路地空間を調査、考察すること

- ・事例の比較を通じて路地空間の特徴の共通点や差異、そしてそれらが生じる要因を明らかにすること

(2) 方法

まず予備調査を行い対象路地を決定する。本調査では、直接対象路地に赴きインタビュー調査、測量調査、資料収集等のフィールド調査を行う。

調査後は今回の調査と永山の調査の結果からそれらの特徴や差異、またそれが生じる要因を明らかにするため、本研究では外からの視線の遮り方や、住居内の人行動に焦点を当てた分析を行う。

2. 予備調査・本調査

対象路地決定は図-1のフローチャートの手順を踏んで行った。地域選択では、木造住宅密集地域である荒川区（町屋・尾久・荒川）、京島（墨田区）、月島・佃島、谷根千・駒込、本郷、麻布を選び、そこから対象路地候補を抽出した。

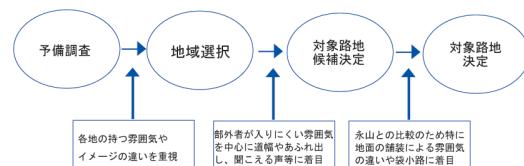


図-1 対象路地決定のフローチャート

表-1 対象路地の特徴

	袋小路	建物の古さ	溢れ出し (植物)	植物以外の溢れ出し	地面(砂利or土)	音	道幅(畳)	その他
根津	○	○	○	○	×	○	2~3	
元麻布	○	○	◎	○	○	△	2	窪地

対象路地候補は表-1 の項目と共に、人の生活が路地空間に感じられることを重視して選出した。この中で各路地の特徴が表れたのは袋小路と地面の舗装の項目である。

中でも舗装の有無はその路地の印象に大きな影響を与えていた。そこで本研究では根津と同じ袋小路だが、舗装があることで異なる雰囲気を持つ元麻布を対象とすることを決定し、本調査を行った。本調査は約 2 カ月の間に 16 日にわたって行った。

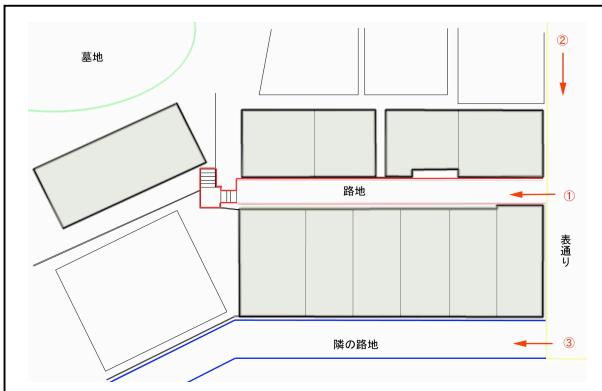


図-2 対象路地簡易平面図（元麻布）



図-3 路地入口より（写真①）



図-4 表通り（写真②）



図-5 隣の路地（写真③）

3. 対象路地の調査結果

元麻布を対象に行った本調査で得られた結果をもとに、対象路地の実測図面を作成した。また、対象路地には図-9 のように計18名が居住していることが分かった。

同時に、住民同士の近所付き合いの関係を表-2に基づいて4段階でアンケートをとり、表-3の結果を得た。

表-2 近所付き合いの指標

評価点	付き合い
1	よく話す、一緒に出かける
2	会えれば立ち話をする程度
3	会っても挨拶する程度
4	会っても挨拶しない

表-3 住民同士の近所付き合い

被評価者	被評価者									評価点	
	Sさん	Oさん	Fさん	Mさん	Yさん	Aさん	Iさん	Tさん	Gさん	Hさん	Kさん
Sさん	2	3	2	1	3	2	2	1	3	2	2.1
Oさん	3	2	3	3	2	4	3	3	3	3	3
Fさん	3	3	2	2	3	2	3	2	2	3	2.5
Mさん	2	3	2	2	4	2	3	3	4	3	2.8
Yさん	1	3	3	3	3	3	3	1	3	3	3
Aさん	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	3.1
Iさん											
Tさん	1	2	3	2	1	4	1	2	2	2	2
Gさん	2	3	2	2	2	3	2	2	1	1	2
Hさん	2	4	2	3	3	4	3	3	1	4	2.9
Kさん	2	3	3	3	2	3	2	3	2	3	2.6
被評価者	2.111	2.889	2.67	2.56	2	3.44	2.3	2.56	2.222	2.778	2.67



図-6 立面図（元麻布）



図-7 1階平面図（元麻布）



図-8 2階平面図(元麻布)

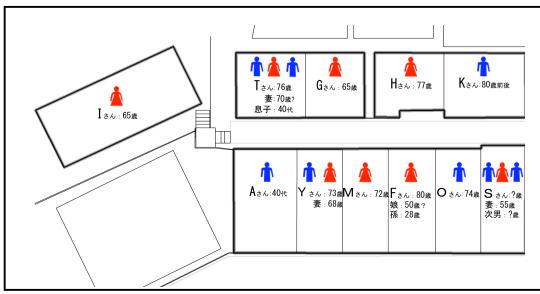


図-9 住民構成(元麻布)

4. 分析・考察

作成した図面とインタビュー調査等を照らし合わせ、特に防御に着目して考察を行った。

(1) 防御

既往研究（参考文献（1））では、路地における各住居の居間が路地と居間の間に玄関等の緩衝領域を設けたり、路地に面する居間の窓をトタンでふさいだりと、各家庭で路地から居間への視線が完全に遮断されていることやテレビを見る向き、机に座る向き等の生活の方向が決して路地に背を向けていないことが指摘されている。

そこで本論文では防御の階層とそこで行われる行為の関係に着目して分析し、路地や住居の空間構成と住居内での行為の場所とを体系的に扱う事を試みる。

(2) 視線への防御

(a) 階層分け

まず階層分けを試みる。

階層分けの基準としては夜間、外から見て人の動きや気配がどれくらいわかるかを用いた。これは誰の目から見ても客観的に判断できること、夜は電気がつくため家の内部まで見えやすく防御の視点から見るとより本質的な状況と考えられるからである。

以上の基準による階層の分類が次の4つである。

可視領域①	夜間に人の姿がはっきりと見える
可視領域②	夜間に人の動きがぼんやりとわかるが、くもりガラス等ではっきりとは見えない
可視領域③	夜間に部屋の電気が付いていることはわかるが、人の動きや姿は全くわからない
不可視領域	夜間に部屋の電気が付いているかどうかもわからない

どの領域かはっきりしない部分は可視領域①と②の中間領域という表現を用いる。この階層分けに従って元麻布と根津の路地平面図を色分けしたものが図-10、図-11である。その際に色は表-4を用いた。

紙面の都合上、ここでは1階部分のみを記載する。



図-10 防御の階層とテレビの位置(元麻布)



表-4 防御の階層色分

階層	色
可視領域①	■
可視領域②	●
可視領域③	○
不可視領域	■

図-11 防御の階層とテレビの位置(根津)

(b) 視線を遮断する要素

元麻布では家の中の視線を遮断する要素として、くもりガラスやカーテン、すだれ、植栽、トタンなどがあった。カーテンといつても、単に窓にかけるだけでなく玄関にもかけるなど住民が独自に工夫をして外からの視線を遮断していた。そして、それにより防御の階層が形成されていた。



図-12 T宅の植栽で覆われた玄関



図-13 S宅のカーテンのつけられた玄関

(3) 防御の度合いとあふれ出し

図-10、図-11を見ると根津の方が元麻布よりも中まで見渡せる家が多く、防御の度合いが低いことがわかる。そこで両者のあふれ出し（=路地空間に置かれた私有物²⁾に着目すると、根津の方がはるかにあふれ出しの量が多い。このことからあふれ出しが住民に何かしらの安心感をもたらす働きを持つことが予想される。

更に両路地の人間関係に着目すると興味深い。根津でも、元麻布と同様に住民同士の人間関係を調査している。これらの調査結果を比較すると根津は近所付き合いの度合いを数値化したもののが平均値が2.28、元麻布が2.56(表-3)で根津の方が住民同士の深いつながりがあった。

以上より、あふれ出しの防御としての機能とともに、あふれ出し、家の内部の空間構成、人間関係との関係性が予想される。

(4) くつろぐ場所

テレビを見る（くつろいで長い時間を過ごす）、食事をするといった行為と防御の階層の関係を検証する。

図-10、図-11よりこれらの行為は基本的に可視領域③か不可視領域で行われることがわかる。しかし中には可視領域②や②と③の中間領域で行う家もある。元麻布のTさんとKさん、根津のI（親）宅がそれである。これらの家は2方向が路地に面しており部屋が路地に面しているため、ある程度仕方ない面もある。しかし、元麻布のSさんや根津のFさんも同じ状況にありながら厚手のカーテンや植栽、トタン等で完全に目隠ししていることを考えると、なぜ可視領域③、不可視領域を作り出さないのか疑問符のつくところである。そこでこれら3軒を詳しく見ると次の共通点が浮かび上がった。

(a) あふれ出しやセットバックなど路地と家とを隔てるようなものが存在すること

これらの家には必ずあふれ出しやセットバック、囲い等で路地と家を隔てる装置が存在する(図-10、図-11)。これらは視線を遮断しているわけではないが、家の中の者に安心感を与え、薄い防御層として機能していると考えられる。

(b) 外に開く住民の人柄

次にこの3軒の近所付き合いを見ると非常に興味深い。まず元麻布のTさんとKさんは相手に対する評価は高いが、周りからの評価はあまり高くない。つまり、自分では周囲の人々と交流していると思っているが相手からはそこまで思われていない人物なのである。一方、I（親）さんの場合は、自分でも周囲の人との交流が盛んだと思っている上に、相手から最も最も交流していると思われている、根津一の社交的な家である。すなわちこの3軒は相手からどう思われているかは別にして、どれも周囲に対して開放的な性質を持っている人物達なのである。

以上より、あふれ出しやセットバック等が防御層としての機能を持つこと、また防御層のあり方と人間性に関することが考えられる。

5 成果

本研究の成果として以下のものが挙げられる。

- ・路地空間と各家の内部空間の構成についての詳細な調査事例を増やした。
- ・「防御」に着目して分析し、今後の路地研究の指針を示した。またその分析手法の一例を示した。
- ・あふれ出しやセットバックが薄い防御の層として機能していることを示した。
- ・人間関係や住民の人間性によって防御層のあり方に特徴があることを示した。

謝辞：本研究は住民の方々の多大なご協力がなければ書き上げることは不可能であった。この場を借りて感謝の意を表したい。本当にありがとうございました。

参考文献

- 1) 永山悟：住民・住居内部との関係性に着目した路地空間の調査と考察、景観・デザイン研究公演集 No. 3, pp. 215, 2007
- 2) 青木義次他：開放的路地空間での領域化としてのあふれ出し その1, 日本建築学会計画系論文報告集, pp. 47, 1993
- 3) 小林秀樹：集住のなわばり学、彰国社, 1992
- 4) 上野・谷根千研究会：新編・谷根千路地事典、星雲社, 1995